

日
整

はつらつ!



●目次

●柔整サロン	50過ぎのおっさん医学博士取得	1
■輝ける未来への取り組み〈大阪ブロック〉		8
● 私たち柔道整復師は全国各地で活躍しています		
●公開健康講座		13
群馬県 第36回ぐんせつ学会 東京都 第2回災害情報セミナー 石川県 高齢聴覚障害者生活訓練・テーピング講習会に講師派遣 兵庫県 元気アップ事業2012介護予防体操教室 愛媛県 健康公開セミナー 熊本県 第2回臨床研究会		
●防災		17
千葉県 平成24年度救急法講習会 和歌山県 県民公開講座 防災講演会 熊本県 県と防災協定締結		
●ボランティア・その他		20
愛知県 災害救護赤十字奉仕団講習会 石川県 第19回かなざわ市民マラソンサポート活動 奈良県 奈良マラソン救護活動報告 和歌山県 第12回和歌浦ベイマラソン with ジャズ 岡山県 第25回車いすふれあいロードレース 鹿児島県 日本一早く開催される市民マラソンでの救護活動		
■学術シリーズ（第15回）	腰痛について	24
●本の紹介	「柔道整復外傷学ハンドブック総論」／「柔道整復外傷学上肢の骨折・脱臼」／「柔道整復外傷学下肢の骨折・脱臼」（三部作）	26
●私の夢	治せる柔道整復師を目指して	27
●投稿	緊急現場での連携を強化／柔道（スポーツ）指導に於ける暴力について	28
■表紙解説		12
■各周年記念式典／平成25年度学術大会		30
■日整文芸		32
■編集後記		表Ⅲ

●Web Page 日整ホームページ <http://www.shadan-nissei.or.jp/>

トップページの最新情報、健康情報誌「日整はつらつ！」VOL.10
または「日整はつらつバックナンバー」から入り当ナンバー広報誌を
クリックしてご覧ください。QRコードもご利用ください。



50過ぎのおっさん医学博士取得

～医学博士 柴田 宗孝 先生に聞く～

聞き手 公益社団法人大阪府柔道整復師会副会長 川口靖夫

本会八尾支部の会員柴田宗孝先生は昨年3月、公立大学法人奈良県立医科大学において、医学博士の学位を取得されました。

学位取得を志されたのはなんと50歳を迎えた平成18年のこと。同大学の生理学第二講座に専修生として入学し、その後の立ちはだかる多くの壁を乗り越え、平成23年8月に高木都教授のもと発表した研究論文により学位を取得。この論文は医学誌「American Journal of Physiology」にも掲載されました。

柴田先生は50歳を機に、なぜ医学博士の学位取得を目指されたのでしょうか。その原動力は？そして、学位を取得された今、柔道整復師業界に訴えかけたいことはなんのでしょうか。このような点と学位取得までの苦労話、そして将来の夢をインタビューしました。

インタビューは、プライベートで共通の趣味である魚釣りに行く中で、30年来の付き合いがある本会の川口靖夫副会長です。

川口靖夫副会長（以下川口副会長）：

まずは、医学博士の学位取得おめでとうございます。また、6年間という長い期間おつかれさまでした。

柴田宗孝先生（以下柴田先生）：

ありがとうございます。

川口副会長：今日はこの6年間の苦労話や、学位取得を目指された経緯、先生が考えている今後の柔道整復師業界のことを伺っていきたいと思います。

●医学博士の学位取得を志した経緯は？

川口副会長：50歳を機に医学博士の学位取得を目指された訳なのですが、なぜそのような大波にご自身で飛び込んで行かれたのか、ま

たその経緯を詳しく教えてくださいませんか？

柴田先生：話は私の書生時代にさかのぼります。私の師匠は、以前大阪社団の会長もされたことがある金城先生なのですが、先生に弟子入りしてから事あるごとに『勉強しろよ！』と言われてきました。今考えてみるとその言葉が事の始まりだったのでしょうか。書生時代は師匠の下でいろいろと勉強しました。その後、この施術所に2代目として戻ってきても勉強会などを自分たちで企画し、勉強の機会を作ってきました。

川口副会長：懐かしいですね。私は柴田先生とは30年来のおつきあいで、金城先生の勉強会にも参加させていただきました。

柴田先生：ほかに勉強会では中部柔整におられた羽原先生や京都大学医療技術短大の武田



【プロフィール】

しば たかむね たか
柴田 宗孝

1955年（昭和30年）5月25日

・大阪府八尾市生まれ

1975年（昭和50年）

・関西大学第一高等学校卒業

1977年（昭和52年）

・明治鍼灸柔道整復専門学校（現明治東洋医療学院専門学校）卒業

1979年（昭和54年）

・関西大学工学部卒業

・金城接骨院に書生として入る

2002年（平成14年）

・柴田整骨院院長に就く

2006年（平成18年）

・公立大学法人奈良県立医科大学 生理学第二講座入学

2012年（平成24年）

・医学博士の学位取得

先生を講師にお呼びして手技などを勉強しました。

川口副会長：そうでしたね。そんな時代もありました。書生時代、師匠である金城先生が柴田先生に“勉強をしろ”と口酸っぱく言われてきたのは、こういった意図があったのでしょうか？

柴田先生：金城先生は日整の学術部や保険部にかかわっていた関係で、柔道整復師に関するさまざまなデータをご覧になられていました。そのデータの中には、柔道整復師はほかの医療人と比較して1年間に本を読む量が少ないことや、学会の内容が非常に乏しいなど、柔道整復師に対して苦言を呈するデータだったようです。そのような背景から柔道整復師の今後を見据えて私に“勉強をしろ”と仰ってくださいったのだと思います。

川口副会長：常に向上心を持って勉強を続けなさいという思いがあったのでしょうかね。とはいっても、なかなか一歩踏み出せずにいる先生が多いなかで、師匠である金城先生の言葉が非常に後押しになったのですね。

柴田先生：そうですね、勉強する場を与えていただいたと思います。昔は勉強する機会が少なかったので助かりました。

川口副会長：最近は接骨医学会主催の学会などもできて、少しずつですが柔道整復師の勉強する場が増えてきていますね。

柴田先生：大阪でも学術大会をはじめ、ナイ

トセミナー（専門講座）や府民健康づくり講座など、昔に比べると勉強をする環境が整ってきているので、若い先生方がうらやましく思います。

昔の勉強会では、ほかの先生から整復法や固定法をなんとか盗もうとしていましたからね。また、勉強会が書生同士の交流の場でもありました。

●今後を担う“若い先生”や“柔道整復師業界”のために

柴田先生：若い先生というキーワードが出てきましたが最近、柔道整復師の養成校が増えてきています。それに伴って若い先生も増えてきています。柔道整復師は『骨折、脱臼、捻挫、打撲、挫傷』を診ることができるのに、捻挫すら診れない先生も多くいるのが現状ですよね。聞くところによると、“30分揉みます”というような施術所も出てきているとか。そういうことをやっている先生は医療人ではないのでは、というかその意識やプライドがなくなっているのではないかと思います。非常に長い歴史がある柔道整復師また柔道整



▲川口副会長（左）に、柔整業界に対する思いを熱く語る柴田先生

復術ですが、このような状況ではこの業界がなくなってしまうのではと危惧しています。この世界でご飯を食べてきている私としては、若い先生に何かを伝えることができないかと思っていました。

川口副会長：そういう思いがある中で50歳をお迎えになられて行動に出たんですね。

柴田先生：そうです。50歳になって一区切りついたなと思い、何か今までとは違うことをやりたい、それと先ほど話にも出た“若い先生”や“柔道整復師業界”のためにプラスになるようなことをやろうと思ったのです。

川口副会長：それが医学博士の学位取得を目指すことになったんですね。

柴田先生：結果としてはそうです。いろいろ考えた中、柔道整復師で医学博士をとっておられる先生は全国には何人かおられますので、50歳になったことを機に私も一度チャレンジしてみようかなと思いました。

●学位取得に向けた6年間の苦悩

川口副会長：その結果、昨年の春に約6年かけて医学博士の学位を取得できたわけですが、その6年の間に私も何度か先生とお話する機会があって、苦勞されていることを少しは聞いていますが、改めて伺います。どういった苦勞がありましたか？先生の場合は施術所をなさりながら、という点がやはり大変でしたか？

柴田先生：施術所を休んだりするのは患者さんには申し訳なかったですが、それ程大変なことではなかったです。研究室に行ってからが大変でした。

研究室というのは誰も教えてくれません。この研究をなさいと課題は与えてくれますが、それ以上は教えてくれません。アドバイスはいただけますが、そこ場で厳しく指導されます。

研究を進めて答えを導くために必要な情報は、海外の論文を読まないと進められません。英語が私にとっては非常にネックとなってい

ましたが、恵まれていたことに研究室の高木教授から、英語上達のためにさまざまな課題を与えていただきました。例えば、生理学の洋書を1冊訳し、月に1回その洋書の内容について発表しました。

それがある程度できるようになった時点で、週に1回海外の論文を読む『抄読会』があり、順番に担当が回ってきます。その読んだ内容についていろいろ質問をされるという流れで、そこで厳しく鍛え上げられました。

川口副会長：方法としては、英語の論文を訳して内容を理解しないとイケないので非常に時間がかかったでしょうね。

柴田先生：そうです、内容を理解するためにはインターネットなどで調べて勉強しなければなりませんでした。

川口副会長：なるほど。

内容を理解して『抄読会』に臨んでも質問に対して回答できなかつたりすると、理解できてないと叱咤されるわけですね。

先生から伺った話によりますと、高木教授は非常に厳しい方でいらっしゃったとか？

柴田先生：厳しいことは否定しませんが、英語ができなかった私のことを考えて、いろいろな課題を与えてくださったりして、今思えば優しい先生でしたね。

川口副会長：高木教授は奈良県立医科大学でも、初めての女性教授で厳しい面もお持ちだからこそ、教授までされているのでしょう。そのときは厳しさがつらいと感じたことがうかがえますが、結果的には先生を学位取得に導いてくれたということですね。

柴田先生：そうですね。結果的には私の学位取得は高木教授あってのものです。普通、学位というのは最低でも5年間勉強しないと取得できないのですが、私の場合4年11か月で論文が通り、学位を取得したのは5年2か月経過したときでした。これは過去最短で、以



▲笑顔で当時を振り返る柴田先生

前に最短取得された方は5年5か月で、長かった方では12年かかった方もいらっしゃいます。おそらく私の場合は歳がいつているからということで、高木教授が早くしてあげようと考えしていただいたかもしれませんが。

川口副会長：私も先生が学位取得のために大学に行くとき聞いた話では、何年かかるか分からないとおっしゃっていましたよね。

柴田先生：当初私は、10年間で取得しようと考えていました。50歳で入って60歳で取得できればOKかなと思っていましたので。

川口副会長：そうでしたよね、私もそのような話を聞いていたので最短で取得されたと聞いたときは、非常に努力されたのだと感じました。

少し余談になりますが、学位取得を志すまでは、休日には一緒に釣りに行ったりしていましたが、きっぱりとやめられましたね。

柴田先生：そうです。学位を取得するまでは何かを断とうと考えました。お酒を断つのは少しつらいなと思い、趣味である釣りを断とうと決めました。

川口副会長：休日に釣りに行く時間もなくな

りますしね。やはり休日も勉強に費やしたのですか？

柴田先生：もちろんです。平日は施術所を閉めてから夜の9時から11時半や12時まで、日曜日は朝の10時から夕方の6時くらいまで勉強をしていましたがそれでも時間が足りませんでした。

川口副会長：先生の場合、勉強だけをしていればよいという状況ではないでしょうからね。施術所で施術をしながら勉強時間を見つけるとなると、やはり夜の時間や休日を勉強の時間に充てることになったのでしょうかね。開業されている先生が、今後先生に続こうと思ってもそこがネックになってきますね。

柴田先生：そうなるでしょうけど、若い先生でしたら脳が柔らかいので少しの時間で吸収できると思います。例えば英語ですが、学位取得には英語が不可欠です。英単語一つにしても50歳の私にはなかなか頭に入らないのです。英単語を覚えて、海外の論文を読んで、文法も覚えなければなりません。文法に関しては、私の娘に家庭教師をしてもらって勉強しました。

川口副会長：娘さんにお手伝いしてもらったのですね。ご家族の支援もあって良かったですね。

柴田先生：そうなんです、娘には助けてもらいました。文法を一から教わりましたので、約2年間家庭教師をしてもらいました。そうして私は多くの時間を費やし英語を勉強しましたが、若い方ならもっと短時間で大丈夫だと思います。

川口副会長：研究をしたり論文を書いたりするまでには、まず英語の壁があるわけですね。

柴田先生：英語の壁があって、それを乗り越えられたら次に論文の壁という流れでしたね。

● “若い先生” に期待すること

川口副会長：先程から“若い先生”というキーワードが多々出てきていますが、我々が柔道整復師になったところと今では、柔道整復師

として目指すものが何か違ってきているように思うのですが、先生はどう思われますか？

柴田先生：私も同感です。我々が若いころは、患者さんの負傷箇所が治ったら嬉しいから『骨折』や『捻挫』を積極的に診てきました。今は骨折や脱臼の患者さんが来たらすぐに医者に行ってくださいと言うみたいです。それが100%間違いだとは思いませんが、その先生の下で働いている若い先生、いわゆる書生さんがかわいそうに思うのです。

30分マッサージしたらいいと教わり、20年後、30年後その若い先生には何が残るのかな？おそらく何かきっかけがないと、その先生もマッサージをする先生になるでしょうね。

柔道整復師なのだから捻挫を治して喜んでもらうことを自分の喜びにもできる先生の方が、医療人としては良いのでは？と最近思うのです。

我々柔道整復師は医療人ですので、医療人として学位が取れます。50歳の私でも取れたのですから、頭の柔らかい若い先生方もきっと取れます。最近は鍼灸師や理学療法士の資格を取ってから、大学の研究室で研究員として働いている方もいらっしゃいます。柔道整復師も働けます。開業するだけではなくそういう道もあるのです。

川口副会長：我々の時代は、資格をとったら開業するという考えしかなかったですね。ただ、現在は年間約5,000人の柔道整復師が誕生している状況でいろいろな道もできています。先生がおっしゃった、柔道整復師として大学で研究員として働くこともできます。

柴田先生：そうですね、そういった道に進む柔道整復師が増えることで、柔道整復師に対するイメージも変わってくることでしょう。

川口副会長：先生は奈良県立医科大学の生理学第二講座で勉強されましたが、先生のように大学に行って勉強したいという方へ、大学に入る方法を教えてほしいのですが。

柴田先生：奈良医大にもありますが、最近は社会人枠を採用した大学院が出てきており、

大学院博士号課程などがあります。まずは社会人の大学院で2年、その後博士課程を4年で学位は取得できます。

川口副会長：しかし仮に社会人枠で入れたとしても、そこからの2年その後の4年は自分の努力次第ですね。

柴田先生：入ってからは、先程までお話をさせていただいたとおり大変ですよ。

●今後の柔道整復師業界に望むこと

川口副会長：そうでしたね。そういう大変な山を1つも2つも乗り越えての、この6年間だったということですが、学位を取得されて現在は一段落されているところですね。先生が学位取得を志されたのは、この業界がアツてのことだと思いますが、これからの業界に対する思いをお聞かせください。

柴田先生：先程から何度も話に出てきている若い先生方に、積極的に柔道整復の学会や勉強会に参加してほしいですね。自分の施術や技術が正しいのか？患者さんにとって良いものか？さらに良い施術法はないのか？というように疑問を持ち外へ出て勉強してほしいですね。施術所だけでやっていると、極端な話ですが30分揉んでいるということが一人の医療人として間違いだということにも気付かないと思います。まずは学会や勉強会に参加することですね。最低限、学会には参加してほしいですね。

川口副会長：まずは参加する機会を増やし、学識を高め、見聞を広めていくという姿勢がなければ、これから先の我々の業界は生き残っていきませんよね。

柴田先生：そのとおりです。柔道整復師はクイックマッサージなどをやるための資格ではなく、健康保険も取り扱える医療人なので、患者さんに還元するべきだと思います。そのためには、自分で勉強して手技などの技術をマスターして患者さんに喜んでもらう。その積み重ねが地域に根付いていくものでしょう。昔から思っていることですが、病院は

患者さんが身構えていくところで、整骨院は下駄ばきで行ける場所だと。若い先生も自分の施術所の下駄ばきで来てもらえるところになるようにして欲しいですね。

川口副会長：そのためには先ほど言った、地域に根付くということが大事でしょうね。この業界が今後、世の中に長く受け止められるようにするには、日々の勉強が大事ですね。

柴田先生：50過ぎのおっさんでも勉強して学位を取得することができたのだから、若い先生にできないはずがないです。実際、理学療法士や鍼灸師の先生が、大学病院で学位取得のため勉強しています。若いうちに勉強をしていかないと経済的にも、体力的にも厳しくなっていくからですね。

川口副会長：成し遂げるまでの期間というのは人によって違いますが、10数年かかった方もいれば、5年でゴールできる方もいらっしゃると思いますね。

柴田先生：先程お話しした社会人枠ですと、修士課程を2年、博士課程4年の6年で卒業できます。

●先生にはまだ夢がありますか

川口副会長：最後に学位取得を成し遂げられた先生に、まだ夢はあるのかを伺いたいのですが？

柴田先生：夢というか今後の柔道整復師業界のことを思うと、4年制の大学ができてほしいと思います。

川口副会長：専門学校は多くありますが、大学ですか？それはどういったお考えからですか？

柴田先生：大学ができて柔道整復師科ができると必然的に大学院もでき、そこで勉強して柔整学博士という人も世に出てくると思います。そうすると柔道整復師業界も躍進できると思います。また、大学ができれば卒業後にほかの大学の医学部や、大学院に進学するなどの選択肢が増えてきますよね。ですから柔道整復師の大学ができてほしいと思うのです。

川口副会長：本日はお忙しいところありがと

うございました。

～・～・～取材後記～・～・～

最後に夢を語られた柴田先生。柔道整復師になったきっかけは、お父様が柔道整復師で整骨院を開業されており、お父様の勧めで大学在学中に柔道整復師の免許を取得されました。本当は海外を飛び回るビジネスマンになりたかったとのことでしたが、いろいろ考えてみると、今の自分があるのは親がこの仕事をしているからだと思ったそうです。また、自分が親の立場になったとき、子供のころに

してもらったことと同じことできるかなと考えたときに、柔道整復師が一番確実だと思い、この道に進むことを決意されたそうです。

そしてこの世界に入ってから「勉強をしろ」と言われ、これは面白い業界だなと思い、のめり込んでいったそうです。

インタビューの内容からわかるように、その向学心の高さ、若い先生方への期待や現状に対する不安、柔道整復師業界の将来を見据えた意見が多くうかがえました。

(広報員 山田 豊)



▲柴田整骨院前にて撮影

輝ける未来への取り組み

《大阪ブロック》

●● (公社)大阪府柔道整復師会 ●●

第2回大阪マラソン ランナーサポート

○第2回大阪マラソン大会概要

開催日時：平成24年11月25日(日)

コース：大阪城公園をスタートし、通天閣や京セラドームなどの名所を通過し、ゴール地点であるインテックス大阪(南港)を目指す。

参加者数：30,458人(マラソン28,343人、チャレンジラン2,115人)



▲道頓堀を疾走する車イスランナー



▲大阪城公園を軽快に走るランナー

○ランナーサポートについて

活動時間：大会当日 AM11時～PM4時

実施事項：ストレッチ、アイシング、テーピング、運動後のケア指導

参加者数：61人(役員・委員26名、専門学院教員2名、学生33名)

処置人数：170人

第2回大阪マラソンに本会は、ランナーサポートとして参加しました。当日は、ブースに来られたランナーに対して問診を行い、症状によりアイシング、ストレッチ、テーピングを施し



▲ランナーサポートに参加した総勢61人

たり、運動後のケアについて指導いたしました。それらに加えて『術後アンケート』と題し、帰宅してからの体の状態と、翌日の体の状態について調査をするために、ハガキアンケートを実施しました。その結果、配布数170通に対して79通（約46%）の回答を得ることができました。

下の図は実際に返信されたアンケートです。ご覧のとおり、一番下にご意見などを求める欄を設けたところ、さまざまなご意見・ご感想などが記入されていました。

アイシングやストレッチなどの施術に対しては、下記のようなものがありました。

- ・ゴール後にはふくらはぎが張っていたが、術後は足がつることなく家に帰れた。
- ・走った後すぐにアイシング、ストレッチをしてもらい大変助かりました。

No. D0160

『第2回大阪マラソン』術後アンケート

該当する項目1つに○を付けてください。

Q1. マラソン当日、帰宅後の痛みはどうでしたか？
1. 痛みなし 2. 少し痛む 3. わからない 4. 痛い 5. 非常に痛い

Q2. 翌朝、痛みの具合は前日と比べてどうでしたか？
1. 痛みなし 2. 少し和らいだ 3. わからない 4. 同じくらい痛い 5. 痛みが増した

Q3. マラソン当日、帰宅して以降、アイシングを行いましたか？
1. はい 2. いいえ 3. その他（ ）

Q4. 当日痛みはなかったが、翌朝に痛みが出たところ？
足の裏 ・ 足首 ・ スネ ・ ふくらはぎ ・ ひざ
太もも前 ・ 太もも裏 ・ 足の付け根 ・ おしり ・ 腰
腰 ・ 背中 ・ 胸 ・ 肩 ・ 首 ・ 二の腕 ・ ひじ
前腕 ・ 手首 ・ 指 ・ 特になし

Q5. 太ももの前の痛みはどうですか？
(下記グラフに該当する、痛みの程度をたて線で記入してください。)

全く痛みがない ——— 中等度 ——— 想像できる一番の痛み

Q6. マラソン後のケアサービスを受けて良かったですか？
1. はい 2. いいえ 3. その他（ ）

その他、ご意見等がございましたらご記入ください。
ストレッチをうけて自分の硬い部分を教えていただき、家庭でもするようにご指導いただき感謝しています。
アンケートにご協力いただきありがとうございました。

- ・アイシングの効果に驚いた。

以上のような意見のほかに「丁寧なストレッチ、テーピングの効果か、いつもの筋肉痛がなく不思議な感じがした」という驚きの声も寄せられました。

また、ラン後のケアやその他アドバイスに対しては下記のようなものがありました。

- ・外反母趾のテーピングも助かりました。
- ・シューズが合っていないという、想像もして

いなかったことを指摘していただいていたがたかった。

- ・ストレッチを受けて自分の硬い部分を教えていただき、家庭でもするようにご指導いただき感謝しています。

このような声から、本会スタッフによるランナーの目線での丁寧な施術がうかがえる結果となりました。

平成25年1月18日(金)に行われた、大阪マラソン組織委員会事務局との報告会の際には、ランナーサポートに参加した本会の川口靖夫副会長より、前述のアンケート結果を紹介し、我々の活動の評判の良さを伝えることができました。大会事務局の方は、ゴール直後のアフターケアに留まらず、帰宅後も継続してできる“ケア”の指導を行ったことが評価されている点に触れ、



▲鈴木理事（左）の説明を真剣に聞き取る学生

次回大会でも引き続きこの活動を実施してほしいとのことでした。

また、今大会を取り仕切った本会の野口茂理事からは、体へのダメージが大きいと思われる、制限時間ギリギリで完走したランナーに対して、大会運営上、我々の活動時間に制限があるため、施術ができなかったことについて「一番ケアが必要と思われるランナーに対して、何もしてあげることができなかったのが心残りだった」と熱い思いを伝え、活動時間の見直しを訴えました。

大会事務局の方は、ランナーに関する多くのデータを収集している我々の活動に感心され、次回開催にあたり必要となればデータの提供をいただきたいと話されました。最後に本会から、



▲報告会左から大阪マラソン組織委員会の事務局阪東部長、辻野課長補佐と本会の川口副会長、野口理事

次回大会はさらにランナーの方たちに楽しんで、満足してもらえる大会になるよう、ランナーサービスに限らず協力する旨を伝え報告会を終えました。

(※問診や術後アンケートから得られたデータは現在、研究事業部において集計・分析しております。これらの結果報告については、本会ホームページにて掲載する予定としております。)

第2回 JIMTEF 災害医療研修コース

日 時：平成24年10月19日(金)、20日(土)

参加者：本会研究事業部員 阪本仁司

参加した団体、人数などの内訳は下記のとおりです。

- (公社) 日本柔道整復師会：17名
- (公社) 日本理学療法士協会：14名
- (公社) 日本鍼灸師会：5名
- (公社) 日本医療社会福祉協会：4名
- (社) 日本作業療法士協会：4名
- (公社) 日本歯科技工士会：3名
- (公社) 日本栄養士会：2名
- (社) 日本言語聴覚士協会：1名
- (社) 日本臨床検査技師会：1名
- (公社) 日本臨床工学技士会：1名
- (社) 日本臨床心理士会：1名
- 以上、11団体、53人



東京都立川市にある独立行政法人国立病院機構災害医療センターにおいて、JIMTEF (公益

財団法人国際医療技術財団) 主催の災害医療研修コースに参加してまいりました。

1. JIMTEF (公益財団法人国際医療技術財団) とは

我が国および諸外国、主として開発途上国の医療技術を振興し、国際的視野に立って医療技術分野における相互の理解を深め、国際協力を推進する事業を行い、もって国際保健医療協力の増進と人類の福祉の向上に寄与することを目的としている団体です。

なお、主な事業として以下が挙げられております。

- (1) 海外の医療技術分野の専門家の研修
- (2) 我が国の医療技術並びにその関連分野の専門家の海外派遣
- (3) 内外の医療関連団体との国際協力活動
- (4) 内外医療技術の調査研究及び啓発事業
- (5) 災害医療事業

公益社団法人日本柔道整復師会としては上記事業の(2)、(3)の分野で同財団法人主催のもと、医療途上国への柔道整復術の普及・国際貢献などのため、海外(タイ、カンボジア、モンゴルなど)において現地の視察を行い、現地の厚労省や医師・伝統医療師などと共にセミナーを行った実績があります。

※詳細については同財団法人のホームページをご覧ください。

(公益財団法人国際医療技術財団 HP <http://www.jimtef.or.jp/>)

2. 災害医療研修コースについて

この研修は、2日間(延べ10時間)にわたり開催され、東日本大震災の教訓により、昨年から災害医療の普及のために開催されております。内容は下記のとおりで、講義、ディスカッションおよびプレゼンテーションで構成されております。

○1日目(19日)

(1) 災害医療概論

小井土 雄一

災害医療センター臨床研究部長・救急救命センター部長 DMAT 事務局長

『災害の定義、種類や行政の対応、日本の災害医療体制について』



▲熱心に聴講する参加者

(2) トリアージ START 方式

小笠原 智子

災害医療センター副救命救急センター長
『トリアージについての説明、および実際に
タグを使った実践、例題演習』

(3) DMAT

近藤 久禎

災害医療センター教育研修室長政策医療
企画研究室長 DMAT 事務局次長
『DMAT の活動内容説明、および東日本大震
災における活動記録』

(4) チームビルディング・組織論

中田 敬司

東亜大学医療学部準教授
『災害時に活動を行う上での組織統括、リー
ダーシップ・メンバーシップ』

○2日目(20日)

(1) 急性期に各職種として何ができるか

ある災害を設定してグループごとにディスカ
ッション+プレゼンテーション

小井土 雄一

災害医療センター DMAT 事務局長

市原 正行

災害医療センター DMAT 事務局

- ・発災後72時間以内に各職種の団体として、
また個人・チームとして

①被災地内で何ができるか？

②被災地外で何ができるか？をディスカッ ションし、プレゼンテーションを実施

(2) 亜急性期～慢性期に何ができるかディス カッション+プレゼンテーション

近藤 久禎

災害医療センター DMAT 事務局次長

- ・各グループに医師1名・看護師1名を加え

た医療班として活動し、避難所に常駐する
という設定で、起こりうる問題を列挙し、
対応について考察を実施

※なお上記2つの設問において、私のグル
ープ構成は柔道整復師2名、理学療法士
2名、医療ソーシャルワーカー1名、歯
科技工士1名の6名

(3) 東日本大震災の経験から

内藤 万砂文

長岡赤十字病院救命救急センター長

- ・実際に東日本大震災や新潟中越地震を含む
8回の救護活動の先頭で医療にあたった記
録や、そこで得た経験や教訓についての講
義



▲講義に耳を傾ける参加者

3. DMAT について

DMAT とは、災害の急性期（おおむね48時
間以内）に活動できる、機動性を持った専門的
な訓練を受けた災害派遣医療チームで、現在全
国で1,002隊あり、隊員数は6,245名です。隊員
の職種内訳は、医師2,057名、看護師2,543名、
業務調整員1,645名から形成されています。

※詳細については別紙「DMAT の活動」、ホー
ムページをご覧ください。

(DMAT HP → <http://www.dmat.jp/index.html>)

4. 研修を終えて

東日本大震災のような災害時において、国民
の医療の一端を担う我々柔道整復師としてでき
ることはないか？という疑問や、医師以外の職
種と連携して対応するという一つの方向
性が示されたと感じました。それらの中で大き
なものは下記のとおりです。

- ①柔道整復師は大地震などの大規模災害で想定される、転倒で起こりうるコーレス骨折・上腕骨外科頸骨折・鎖骨骨折や下腿骨骨折、肩関節脱臼などの整復・固定の応急処置を、電力がないような状況下において医師以外で唯一行える、整復のスペシャリストであるということ
- ②トリアージは医師でなくても訓練を受けていれば誰でも行うことができるということ

このような点を踏まえ、本会として災害医療に関してできることとしては、下記のことが考えられました。

①本会附属の災害医療チームの発足

大震災発生時に避難所などに派遣するチームを発足させ、骨折・脱臼などの外傷の応急処置を実施する。実際に群馬県では赤十字のチームと協力し、そのチームに帯同し現地に派遣された実績があるとのこと。

チーム発足の1つの案としては、緊急時に参集できる各市町村別会員名簿を作成（全体で100名程度）し、災害時には救護活動などの支援にあたるようにします。

②DMATへの参画

今回参加した他府県の柔道整復師の方もおっしゃられていましたが、DMATに柔道整復師

が参画できるように働きかけることにより、災害時において国民へ医療を提供することを可能にしていかなければいけないと思います。そのことが、柔道整復師の業務への理解や地位の向上につながると考えます。実際に今回で2回目となるこの研修は、医師・看護師以外の医療関連団体を招いて行われており、今後の災害医療の在り方について模索していると考えられました。私自身、意見交換会でお話しさせていただいたDMAT事務局長小井土氏も「今回の東日本大震災の現場を見て、柔道整復師や理学療法士の力が必要だという認識した」と、おっしゃられておりました。その話から私は、現場でそういったニーズがあるということを実感しました。しかしながら、この問題に関しては大阪だけのものではなく、柔道整復師業界全体で取り組むべきと思いました。

今後近いうちに起こると想定されている南海トラフ地震や東海地震などの災害において、我々柔道整復師が災害医療活動を行うことは十分可能であり、本会としても、協力体制の確立やそれを実施するための準備を推し進めるべきものと思いました。

（広報員 山田 豊）

〈表紙解説〉

太陽の塔

（公社）大阪府柔道整復師会

広報事業部 池田 孝

1970年に開催された、日本万国博覧会のシンボルゾーンにテーマ展示館として芸術家の岡本太郎氏がデザインし、母の塔・青春の塔・大屋根と共につくられました。「太陽の塔」は過去・現在・未来を貫いて生成する万物のエネルギーの象徴であると同時に、生命の中心、祭りの中心を示したもので、博覧会開催期間中、テーマ館の来館者（約920万人）に多くの夢と希望を与えました。塔の頂部には金色に輝き未来を象徴する「黄金の顔」、現在を象徴する正面の「太陽の顔」、過去を象徴する背面の「黒い太陽」という3つの顔を持っています。構造は、鉄骨、鉄筋コンクリート造りで一部軽量化のため吹き付けのコンクリートが使われています。博覧会当時は展示空間でしたが、現在は公開していません。太陽の塔が真つ直ぐ見つめる先のように、これからの柔道整復業界もしつかり先を見据え、磐石な業界を目指していききたいと思います。



私たち柔道整復師は 全国各地で活躍しています。

健康づくり(公開健康講座)、スポーツボランティア
防災・救護・介護など

公開健康講座

群馬県

第36回ぐんせつ学会



本会は、平成24年10月14日(日)午後1時から、標記学会を「群馬県公社総合ビル」で開催されました。今年は、県内4地区から計5名の会員が日頃の研究成果を発表されました。この中から、平成25年3月に本県で開催される関東学術大会の本県代表が決定します。

第1発表は、太田市接骨師会 加曾利正美会員による「高齢者の転倒予防インソール」。

理想的な歩行動作は「あおり歩行」です。独自の理論からインソールを作成し、片足バランステストなどで足の安定性・歩数・時間・速度などを検討しました。このインソールの使用により両足の挙上、歩行速度や姿勢が改善されま

した。高齢者の歩行パターンの改善は今後、重要課題になると思われます。

第2発表は、桐生・太田・館林地区代表 家中周作会員による「第5中足骨基部骨折テーピング固定法一考察」。

第5中足骨基部骨折の処置施術に対し、テーピングのみを使用し、良好な早期治癒結果が得られた3症例を検証。テーピング固定で、足底アーチを保存し加重することで、骨折部に圧が加わり、動揺を最小限に抑えながら早期からの歩行ができます。

第3発表は、渋川・沼田地区代表 星野晶会員による「高齢者の膝関節筋力向上のために運動療法を取り入れて」。

高齢者の通院者数のうち、膝関節捻挫の占める割合が約40%。その中で、愁訴が長期間残存し施術に難渋するケースが約50%でした。

この原因の一つに、大腿四頭筋などの萎縮や筋力低下が挙げられます。膝関節周囲の筋力向上のためには自己管理意識を向上し、個々にあった運動療法が必要不可欠です。

第4発表は、高崎・富岡・安中地区代表 櫻井保男会員による「腰部捻挫に施す手技療法」。

腰部捻挫で、股関節付近の筋肉を外転し、内外旋を行うことにより症状が急激に改善された症例に注目しました。仙骨部・腰椎部・股関節部の筋群の緊張をやわらげることで、早期に痛みを緩和、回復力を促進する効果があります。施術は2つの基本操作を使い、仙骨部・臀部・

股関節部に施す手技を紹介しました。

第5発表は、前橋・伊勢崎地区代表 古平和 典会員による「軽度な膝関節捻挫における早期運動療法」。

患者さんの膝の悩み、「施術を受けて良くなってきたのに少しの動作で再負傷してしまう」との相談から、その要因の一つに、膝関節を痛めるスクリーホームムーブメント（膝関節終末強制回旋運動）が正確に行われていないことがありました。そこで、今回、大腿内転筋群の運動療法に着目しました。この運動の実施により、その後の評価と測定器による結果で、筋力強化に有効で、再負傷防止に効果があり、膝関節捻挫の早期回復に良好な結果を得ることができました。

会場では今年も学術の研鑽と技術の向上を目的に多くの会員が聴講しました。

（広報員 永井 毅）

東京都

第2回災害情報セミナー

平成24年11月4日(日)、東京都柔道接骨師会館3F 研修ホールにおいて「平成24年度第2回災害情報セミナー」が開催された。

7月に続いて行われたこの「災害情報セミナー」は、これまで「災害時アクセス会議」の名称で行われてきた講習会をリニューアルしたものだ。阪神淡路大震災を教訓に、本会ではホームページ（HP）に「災害緊急連絡用ブログ」を立ち上げ、そこにアクセスすることで地域の被災状況やライフラインの状況などの情報を確認・発信するための機能を持たせた。その利用方法を会員に修得させることをメインとして行われていたのが「災害時アクセス会議」であっ



▲災害情報セミナー

た。それに対し「災害情報セミナー」では、「災害緊急連絡用ブログ」の利用方法はもちろんのこと、災害時に役立つ情報の収集方法を、本会のHPの活用を中心に修得することで、その基礎知識から柔整業界の情報、また施術に関する学術的情報などまでも収集する応用方法を学ぶ講座となっている。現在情報は限りなく入手できるが、正しい「情報」を自分自身で収集・判断し行動に移すことは、災害時だけではなく、現在柔整業界に起こっているさまざまな問題を乗り切るために必要不可欠であり、そのために数段パワーアップした内容となっている。

セミナーは長尾広報部員の司会のもと、新井理事から挨拶があり、参加者へ業界の現状を説明すると共に、情報の重要性を理解していただきたいと述べられた。続いて、玉井広報部員の説明により、本会HPの「災害緊急時連絡用ブログ」へのアクセス方法の講習が行われた。各自が携帯・スマートフォンを操作すると、皆がブログへアクセスできるようになるのに長い時間は要さなかった。そして参加者全員がアクセス方法を習得した後、新井広報部長による講習に入った。

『本会HPは日々進化しており、内容は随時更新されています。情報は一度入手したからそれでよいというものではなく、絶えずアクセスし更新しなければなりません。このセミナーで情報を身近にすることを学んでいただければと思います』と述べられた。スクリーンに映し出された説明画像と、本会HPの実際の画面を見ながら行われた講習は、参加者の目を奪うに十分なインパクトがあるものだった。特に、本会HPの実際の活用方法を説明すると、今までHPを表面的にしか利用できていなかったことに気付かれ、細部まで作り込まれていることに改めて驚かれたようだった。

セミナーの最後には、参加者からのHP以外のさまざまな質問にも新井理事が一つひとつ丁寧に答えた。やはり、宙に浮いたままとなっている、柔整療養費の料金改定に不安を抱かれている会員が多く、また多くの人が作為的な情報に振り回された経緯もあり、この点についても情報を精査する必要があるとの認識が持てたといえる。

ほかにも、施術に関することから本会や業界

全体に関することまで、どんなことにも的確にお答えくださり、多くの質問に予定の時間をオーバーするほど熱心に応じられた姿が印象的であった。

この『災害情報セミナー』は、平成25年度以降も継続して行われる予定である。「情報」は生きものである。常に新鮮な情報を入手することを心掛けていただくために、このセミナーも常に進化して行う予定である。広報部では、いまだ参加していない会員はもちろんのこと、毎回参加しても意義のあるセミナーにしていく所存で、全会員の参加を心待ちにしている。

(広報員 新井 宏)

石川県

高齢聴覚障害者生活訓練・ テーピング講習会に講師派遣

平成24年11月7日(水)、松ヶ枝福祉館にて、平成24年度金沢市高齢聴覚障害者生活訓練の講演会が開催されました。この講演会の講師派遣依頼が金沢市聴覚障害者福祉協会から本会にあり、『柔道整復術と加齢性腰痛・膝痛』と題して、本会の中田健市学術部長が講師を務めました。

約20名の高齢聴覚障害者や関係者に対して、柔道整復術・柔道整復師の業務・保険の適用範囲などについて説明したほか、腰痛になる生活習慣、急性腰痛、慢性腰痛、膝の痛みについて、手話通訳者の協力を得ながら行いました。

続いて、姿勢・生活習慣・その予防法をスライドで参照し、聴覚障害者でもわかりやすいように、身振り手振りを交えながら説明しました。

参加者からは、「一人ひとりの質問に丁寧に対応して、聞こえない私たちに分かりやすく講演していただいて参考になりました」と大変喜ばれました。

また、平成24年12月4日(火)には、野々市市中央体育館会議室にて、野々市市に所属するスポーツ団体を対象にテーピング講習会が開催され、24名が参加しました。この講習会の講師派遣依頼が野々市市体育協会から本会にあり、本会の山下純二サポート接骨石川委員長が講師を務め、テーピングの基本と実技を講演しました。約1時間の座学ではスライドで説明し、実習では足関節、膝関節のテーピングを中心に行われ

ました。

参加者の中の一人でシンスプリントに悩んでいた中学生には、講習会終了後にその痛みに対応したテーピングを行い、走り方の正しいフォームについて指導をしました。

講習会後のアンケートでは感謝の言葉が多くみられ、参加者には大変好評でした。

(広報員 佐藤裕之)

兵庫県

元気アップ事業2012 介護予防体操教室

地域の高齢者の方を対象に運動機能の維持向上、健康への意識向上を図り、介護予防へとつなげていくことを目的に、本会会館5階大ホールにおいて、平成24年9月27日から平成24年12月13日までの3ヶ月間、全5回にわたり上記教室を開催しました。

本会オリジナル「頭いきいき柔らか体操」をはじめ、ストレッチ、筋力アップ、脳トレリズム体操など、坐位での運動を中心に行いました。また、初回と最終回には下肢筋力、バランス、柔軟性、認知機能の測定、転倒恐怖感の調査を行い、最終回には個別に体力の評価やアドバイスをさせていただきました。

約30名の参加者の方は、とても熱心に運動され、「楽しく運動ができた」「また、参加したい」など、大変ご好評をいただきました。なかには、地域に戻って今回の内容を指導されている方もおられ、我々の活動がさらに広がりを見せているのはうれしい限りです。

今回の体操教室を踏まえ、運動の効果などを検討し、今後も地域の皆様の健康増進のために、



▲頭いきいき柔らか体操

よりよいプログラムを提供していくとともに、地域支援事業の介護予防における柔道整復師の活用について、行政にもご理解を得ていきたいと思っています。

(広報員 相江勝弘)

愛媛県

健康公開セミナー

本会主催の健康公開セミナーが、一般公開として平成24年12月16日(日)10時から、国際ホテル松山において、認知症の研究における最先端、かつ新聞、マスコミでも有名な愛媛大学大学院加齢制御内科学(老年・神経内科)講師で、愛媛大学医学部附属病院抗加齢・予防医療センター長の伊賀瀬道也先生をお招きして～アンチエイジング研究の最先端を走る～「世界へ発信する認知症予防のための6つのヒント」というテーマで開催された。毎年、愛媛県内の著名な講師を招聘して、一般公開として行われている公開セミナーは今年が6回目となった。

学術部の永易賢一郎理事の司会進行により開始され、本会浜野士朗会長が講師の伊賀瀬道也先生と一般市民に対してお礼を述べられ、和家慎一郎学術部長より講師の紹介の後、講演が行われた。

講演の中で、伊賀瀬先生は愛媛大学医学部附属病院抗加齢・予防医療センターにおいて、平成18年2月以降6年間で得られた、延べ約2,000名(平均年齢約67歳)の抗加齢ドック(アンチエイジングドック)受診者から世界初の医学的データを、認知症を予防するために知ってもらいたいと、以下の6つのヒントについてデータを基に詳しく講演された。それは、



▲講演する伊賀瀬先生

- (1) 血管が硬いと認知症になりやすい
 - (2) 片足立ちで認知症が見つかる可能性がある
 - (3) 赤ワインで認知症予防ができる
 - (4) 夜間の異常血圧変動は認知症につながる
 - (5) 皮下脂肪が少ないと認知症になる
 - (6) 見た目年齢が高いと認知症になりやすい
- というような内容であった。

また、「自分の身体の老化度の検査をしてみたい」「不安だ」、「いろいろ心配だ」と言われる方は完全予約制なので、「愛媛大学部附属病院抗加齢・予防医療センターまでお問い合わせください」とPRもされた。

講演終了後、会場からは多くの質問も出て、質疑応答が行われ、閉会の挨拶を三宅喜八郎副会長が行い終了した。

(広報員 井関澄男)

熊本県

第2回臨床研究会

12月8日(土)、熊本市国際交流会館において、第2回目となる当会学術部主催の臨床研究会が開催されました。通常行われている当会主催の学術講習会は、外部より講師をお招きして講習会を開催していますが、この臨床研究会はそれ



▲テーピング実技

とは別に、会員の中から講師を選び、テーマを設けて発表、ならびに会員同士で実技を実際に行うという内容となっています。第1回目は昨年6月に開催されました。

今回は今年2月17日開催されます、第2回熊本城マラソンに、当会から約50名がボランティア活動の一環として、体のキュア、ケア、予防の対応を昨年に引き続き行いますので、その際の手順、確認事項などを共有するため、事業部

との合同開催となったものです。

4名の会員が講師で、それぞれ自分の得意な分野での発表となり、約50名の会員も真剣なまなざしで受講し、皆で習ったばかりの実技を学習しました。

また、地元熊本日新聞社が取材に来て、この講習会の模様は、翌日の新聞に取り上げられました。

(広報員 井手栄治)

防災

千葉県

平成24年度救急法講習会

平成24年12月2日(日)本会会館において、日本赤十字社千葉県支部による救急法講習会と検定試験が、本会役員、防災関係部員、防災対策支部長、防災対策支部員および受講希望者(会員・会員の家族・知人)を対象に行われた。

はじめに田中副会長の開会の辞があり、岡本会長は挨拶の中で、「3.11東日本大震災以降、マスメディアにおいて度々報道され、近い将来に起きるであろうと言われている首都圏直下型地震、東南海地震などなど、大規模地震災害に対して国民の関心が高まっています。

国および地方自治体も防災への備えを、さらに促進する施策を考えています。今、公益社団法人への移行を目指す本会も、県民の健康を守る一員として、災害救助に貢献すべきノウハウをより高める上でも、本日の講習でしっかりと勉強しスキルアップしていただきたい」と述べ



▲講習を受ける参加者



▲指導員における実技講習

た。

続いて時田事業部長より、本日の講師紹介とタイムテーブルの説明があった後、講習が開始された。救急法基礎講習5時間(講習4時間・検定など1時間)内容は傷病者の観察の仕方および一次救命処置(AEDを用いた心肺蘇生法・異物除去法・止血法)など、救急法の基礎が、日本赤十字社千葉県支部救急法指導員4名により、厳しさの中にもユーモアを交えた講習が行われた。受講者は講習終了後に検定試験があることを告げられたせいか? 真剣に取り組んでいた。

次に検定試験が行われた後、解答の解説が行われ和やかなうちに講習会は終了した。

高橋副会長は閉会の辞で「講習を受ける皆さんの真剣なまなざしを見て、公益社団法人への移行を目指す団体としてふさわしい確かな手応えを感じた。さらに研鑽を重ね地域貢献に生かしていただきたい。そして熱意溢れる講習をしていただいた日本赤十字社の指導員の皆さん、本当にありがと

うございました」と挨拶された。

なお、全課程修了者に受講証、検定合格者に終了認定証が交付された。

(広報員 渡辺 勇)

和歌山県

県民公開講座 防災講演会

平成24年11月23日(金・祝)、和歌山県勤労福祉会館プラザホープにて、標記講演会が開催された。

本会の原正和会長の挨拶の後、和歌山県議会議長山下直也様に挨拶をいただきました。

今回は、「南海トラフ巨大地震の被害想定と課題」と題して、関西大学社会安全学部社会安全研究センター長 河田恵昭教授に講演を行っていただいた。

近い将来発生が予想される「南海トラフ地震」。本県での被害予測は、津波や建物の倒壊などで最大死者数は8万人、被害を受ける建物数は19万棟に上ると内閣府から公表があり、地震に対して日頃の備えや意識が重要で、防災の意識・知識を高めていただけるよう県民公開講座として開催された。

「南海トラフ地震」が起こると、沿岸部では6時間も津波が続くと予想されるので、「一波の津波がたいしたことなかったから今度も大丈夫だ」「いったん避難して、もう大丈夫だと勝手に判断をして、家に荷物を取りに行ったときに被害に遭う」など、思い込みによる判断が最も危険である。

また、地震で建物の被害が少なかったとしても、ドアが開きにくくなったり、襖に隙間ができたなどの小さな被害があった場合、次の地震で全壊・半壊する可能性が高くなるので注意が



▲講演する河田教授

必要であるとのことだった。

また、防災対策を実施することによる効果は、

1. 住宅の耐震化の推進による全壊建物棟数の減少

現在の耐震化率79%

90% ————— 4 割減

95% ————— 6 割減

2. 避難の迅速化による津波犠牲者の減少

早期避難しない場合を100とすれば、

- ①早期避難率を高め、呼びかけをすれば

————— 5 割減

- ②直後に避難すれば ————— 6 割減

- ③避難ビルを活用すれば ————— 7 割減

上記以外にさらなる対策による犠牲者の減少

1. 津波避難ビルの指定をさらに推進する
2. 避難場所・避難施設などの整備促進
3. 施設配置の見直し

津波防災地域づくりに関する法律を適用して

4. 高台移転
5. 土地利用計画の策定

そのほかに

6. 地震・津波観測網の整備
7. 地震発生予測も含めた調査研究の推進

地震の発生を止めることはできないが、防災対策を施すことにより被害を最小限に抑えることはできる。ハード面の対策は国や県などであるが、ソフト面すなわち私たち個人が、いかに日頃から防災意識を持ち、備えていることの重要さが、今回の講演を聞いてよく理解できた。

当日、実施したアンケート結果です。

アンケート回答数 196名(回収率、65.3%)

1. 年齢層

20歳代 9 人、30歳代 23人、
40歳代 29人、50歳代 63人、
60歳代 45人、70歳代 21人、
80歳代 6 人

2. 住まいの地震対策

家具の固定

している 64人、していない 129人

地震保険

加入している 85人、加入していない 90人、
加入しようと思う 17人

3. 地域の避難場所

知っている178人、知らない18人

4. 家族で避難場所を決めている

決めている135人、決めていない61人

5. 災害用備蓄品

用意している108人、用意していない88人

6. 今回の防災講演会に参加して防災意識が変りましたか

変わった172人、変わらない12人

アンケートの結果、今回参加された方は比較的防災意識は高いようですが、具体的な対策を講じているかという点、そこまでは準備不足であるというのが現状のようです。今回の講演をきっかけにして、具体的な対策を講じていただければ幸いです。

(広報員 佐々木正美)

熊本県

医師会に次ぎ県と防災協定

平成24年12月12日(水)、熊本県庁において熊本県と本会との防災協定締結式が行われました。

県側から蒲島県知事はじめ公務室長、健康福祉部長と立会人として前川熊本県議会議員が出席、当会からは松村会長、杉本副会長ほか理事5名と事業部員の1名が出席。はじめに協定書を取り交わされ、県知事より「防災協定の申し出を受け、県としても非常に心強く嬉しく思います。本年7月12日の九州北部豪雨により熊本県も甚大な被害を受け、防災のあり方を今一度見直す時期であります。これからのさらなる活躍とご協力を心よりお願い申し上げます」と謝



▲蒲島知事(右)と松村会長

辞をいただき、松村会長からは柔道整復師のこれまでの歩みや、当会の活動内容および救護に関する取り組みなどの話をされました。

その後10分間程の歓談の中で、今回の九州北部豪雨により自ら被災者であるにもかかわらず、地域の救護活動にいち早く積極的に参加した、阿蘇在住の木村事業部員の体験談に同席者全員が感銘を受け大きな拍手が沸き起こりました。

今回の締結は、当会における東日本大震災ボランティア・阿蘇豪雨災害ボランティアならびに国際医療技術財団(JIMTEF)研修会などへの積極的な参加の実績を認めていただいた結果にもよるものと思います。職業を通じその技術をもって社会に貢献することができることは、私たちにとっても大きな喜びや励みであります。本県においては、医師会に次ぐ2番目の協定団体となったことに誇りを持ち、近年多発する災害に対する防災意識を高めながら、今私たちに何ができるかさらに研鑽を重ね、医療従事者の一員としてこれからも社会貢献に取り組んでいく所存です。

(広報員 井手栄治)

ボランティア・その他

愛知県

災害救護赤十字奉仕団講習会

名古屋で初雪を観測した、昨年12月9日(日)午前10時から正午まで、本会会館3階講堂にて災害救護赤十字奉仕団講習会が開催された。この講習会は、日赤奉仕団に参入している、本会会員の災害救護に関する、知識と技術の向上を目的として、事業部が企画し日赤愛知県支部のご協力を得て行われている。過去の講習会は「救急救命」が主なテーマであったが、今回は「高齢者の避難所生活での救護」に焦点を当てて、避難所生活において誰もが知っておきたい知識や支援技術を習得するために開催され、49名の会員が積極的に受講した。

講習会は小林弘治事業部長による司会で始まり、佐久間稔晴会長は開会の辞で「支部の代表として柔道整復師として、緊急時に避難所でしっかりとした救護態勢がとれるよう一緒に勉強しましょう」と挨拶。

講義は日赤愛知県支部講習課看護師 加藤美恵子講師と同支部同課看護師 高橋世司子講師により進められ、前半は、日本赤十字社の紹介



▲リラクゼーションの仕方



に続き、「災害時における生活支援 災害が起こったとき、あなたが支援できること」と題する配布された小冊子により行われた。人為災害・自然災害について、災害時要援護者について、災害が及ぼすところとからだの影響、気を付けたい病気や症状などについて説明があった。特に、生活不活発病（避難所で高齢者などが「動きにくい」ために「動かない」でいると「動けなくなる」状態で、心身の機能が低下すること）は目新しい病名であるが、医学用語では「廃用症候群」で阪神淡路大震災以降多発し、厚生労働省などが注意を呼びかけている。

続いて講義後半は10時40分過ぎから、床にブルーシートを敷き、具体的な支援方法として実践指導が行われた。2人1組になり、避難所の床上でのポイントを押さえた移動介助の技術、肩や背中にやさしく触れるスキンシップによるリラクゼーションの仕方、カップ1杯の熱湯でのホットタオルの作り方、ダンボール箱を利用した足浴の方法、毛布を使った両手が自由に使えるガウンの着込み方、2枚の風呂敷を使ったリュックサックの作り方と、日常においても大変役立つ知識・技術である。

最後に、今回の講習内容を地域の方々に広めて欲しいと希望され、さらに、被災地ではボランティアにもストレスが加わるため、ボランティア同士でグループを組んで、心のわだかまりを吐き出すような場を必ず作ってほしいと締めくくられた。柳田松三副会長が講師の方々に謝辞を述べ、和気あいあいとして連帯感のある雰囲気の中、実践的な講習会が終了した。

(広報員 長谷川貴一)

石川県

第19回かなざわ市民マラソンサポート活動

平成24年11月11日(日)に、第19回かなざわ市民マラソンが開催されました。金沢市営陸上競技場発着で10キロ、5キロ、3キロの男女年齢別33部門に分かれたこの大会には県内外から3,807人の選手が参加されました。

この大会の選手のサポート活動を、石川県スポーツトレーナー連絡協議会（以下、IST）から依頼を受け、本会のサポート接骨石川（以下、SSI）6名がISTと協同で行いました。スタート前はコンディショニング、テーピング、ストレッチを中心にサポートし、ゴール後はアイシングやストレッチを行いました。

この大会は平成27年に北陸新幹線の開通に合わせて、金沢シティーフルマラソンとなる大会であり、ISTが中心となりSSIが全面協力するサポート活動となります。サポートするトレーナーブースではスポーツドクターや、そのほかの医療従事者で構成され、平成27年度のシティーフルマラソンでは、参加者1万人に対してサポートする活動となる予定です。今回はその大会を想定しての活動となりました。

（広報員 佐藤裕之）

奈良県

奈良マラソン救護活動報告

平成24年12月2日（日）、第3回奈良マラソンが開催され、本会も救護ボランティア活動に参加しました。

当日は前日からの寒波により、平野部でも積雪があり、日中の気温も5℃程度までしか上がらない厳しい寒さの中での活動となりました。

救護活動地点は、フルマラソンの往路20km、復路30kmに当たるところで、復路で不調を訴えられるランナーへの対応が、主な活動でした。

奈良マラソンのコースの特徴としては、公称69mという大きな高低差とその登り下りの回数の多さが挙げられます。大阪マラソンの高低差が25mであるので、いかにランナーへの負



▲ランナーへの救護活動

担が大きいコースかが推し量られます。その結果として、救護所を訪れるランナーの訴えも下肢に集中していました。

具体的な救護内容は、下肢の痙攣や筋挫傷、筋膜炎、膝の疼痛などに対してのアイシングや柔整マッサージ、ストレッチ、テーピングの処置が主なもので、場合によってはレースの棄権を勧めることもありました。コースには、9か所の関門が設けられており、関門通過の制限時間が設定されているため、普段の施術と違い、あくまでも応急処置に重点を置き、早々にレースへ復帰させることも心掛けました。

足を引きずりながら救護所に入ってきたランナーが、応急処置をした後、少し足取りを軽くし、お礼や感謝の言葉とともに、元気を振り絞ってコースに戻って行く姿には、かえってこちらが励まされる思いでした。

第1回目の奈良マラソン開催時から救護ボランティア活動に参加した。当初は公式パンフレットの協力団体欄に名前すら掲載されていませんでしたが、2回目、3回目と参加、協力した結果、ほかの多くの協力団体と同様に、「(社)奈良県柔道整復師会」の名前が正確に記載されるまでになってきています。しかし、主催者側との事前協議の不足が原因の不具合が多々あり、今後は、それらを改善することで、より充実した救護活動が展開していけるものと思われます。

また、このような大きな大会での経験を、ほかのボランティア活動にも生かしていくことが、公益社団に移行した後に、活動の場を広げていく一助になるものと思われます。

（広報員 中川雅文）

和歌山県

第12回和歌浦ベイマラソン with ジャズ

平成24年10月28日（日）に、和歌山マリーナシティから和歌山港間で開催された「和歌浦ベイマラソン with ジャズ」の救護・トレーナー活動に参加しました。日本初のミュージックマラソンとしてスタートし、JAZZ マラソンの愛称で親しまれてきた「和歌浦ベイマラソン with ジャズ」も今回で第12回目を迎えました。また、このベイマラソンはエントリー数の約4割が女

性ランナーで、全国的にもトップクラスの女性比率の高い大会です。

コース（距離）設定も、ハーフマラソン・10km・5km・3km・2km ジョギングと豊富で、出場者も本気で記録を狙って走る人から、家族でジョギング感覚で楽しみながら参加している人までさまざまです。大会総エントリー数は12,544人で、ハーフマラソンのエントリー数が最も多く5,020人でした。

今回の大会も本会とJATAC（ジャパン・アスレチック・トレーナーズ協会）、鍼灸師会との同じテントでの救護・トレーナー活動で、新たにアロマセラピーの団体が加わりました。主に、ハンドマッサージをしていたようです。1つのテントで、いろいろな目的・考えをもった団体が活動するのは若干やりづらかったのですが、主催者側の事情も考えるとやむを得ないかと思います。本会からは8名の会員が参加し、JATACからは6名、鍼灸師会からは12名の参加でした。

今回の本会が施術した利用者数は、168人で、前年より約3割減少しました。原因は、雨で前半の出足がかなり少なかったのと、鍼灸師会さんのベッド数の増設による結果だと思っています。あと、雨のために筋肉の疲労が少なかったのも



◆トレーナーコーナー



関係があったのかもしれませんが。

本会としては2回目の参加となった今大会でしたが、他団体との兼ね合いといった点を事前に打ち合わせをしっかりとしておく重要性を感じました。本会の救護・トレーナー活動をしっかりと県民の皆様にアピールできるように、次年度の準備をしていきたいと思います。

（広報員 佐々木正美）

岡山県

第25回車いす ふれあいロードレース

平成24年10月7日（日）、岡山県の中央部、吉備高原にて『第25回 岡山吉備高原車いすふれあいロードレース』が行われました。このレースは「疾走！快走！熱走！」のスローガンのもと、障害のある人もない人も同じフィールドで共に参加し、お互いの理解と交流を深め、競技力向上と健康や体力づくりを目的として、車いすの部と一般の部あわせて1,600人以上の選手が参加して、3キロ、10キロ、ハーフの3種目で競われるロードレースです。本会もボランティアとしてスタッフを派遣して、出場選手のウォーミングアップ、クールダウンなどのケアを行いました。

事前調整や準備を行った後、当日は早朝から現地に集合し、ケアブースの設営・備品の準備、手順の確認などを済ませ、選手を待ちました。開会式が始まる前後から選手が見え、その数はスタート時刻が近づくにつれ多くなり、設置した十数台のベッドはまたたく間に満床になりました。選手の主訴を聞き、お話をしながら柔整マッサージやテーピングなどのケアを行って、選手を送り出しのフル回転が続きました。

時間差でスタートされる各種目に合わせて、ウォームアップに来られる方、競技を終えてクールダウンに来られる方と、レース中はケアブースにはひっきりなしに選手が来られました。レース終了時には、標高の高い高原地方特有の、急な天候悪化で雨となり急激に気温が下がり、筋痙攣を起こして来られる薄着のランナーがいらっしゃいました。ケア後、何とか歩けるようになり安堵して帰られる姿が印象的でした。

選手の声聞いてますと、「こんなコーナー



があったのか」、「おかげで楽しかった」、「競技前に助かる」、「安心できる」、「疲れが取れた」など、おおむね好評な声が多かったようです。

このようなケアブースの運営で競技者の方の手助けになり、怪我の予防やパフォーマンスの向上、また、社会貢献により柔道整復業務への理解がより深まれば、大変有意義なことであると実感いたしました。

(広報員 馬塩廣志)

鹿児島県

日本一早く開催される 市民マラソンでの救護

新春の薩摩路を駆ける、第32回いぶすき菜の花マラソン大会（実行委員会主催、鹿児島放送など共催）が平成25年1月13日（日）、鹿児島県指宿市であった。国内で最も早く開かれる市民マラソンとしてすっかり定着し、フルマラソンに過去最多の18,573人が参加。開聞岳の麓などを巡るコース沿いでは、地元住民らが育てた菜の花約800万本が満開になっている。

今年はあいにくの、時折強く冷たい雨が降る悪天候のなか、参加者たちはカッパを着たり、ビニール袋をかぶったりしながら、思い思いの

ペースで走った。沿道では約1,200人のボランティアが、菜の花の漬物やサツマイモなどをランナーに振る舞った。

ランナーの中には、着ぐるみを着たりアニメのキャラクターに扮装したりして見物客を楽しませる人もいた。7.5キロポイントから2.5キロごとに、菜の花の漬物やお茶などが用意され、池田湖畔の給水地点では、振る舞われた一口大のバナナやふかしいもをほおぼりながら走る姿も見られた。

当会は、35キロ付近のJR山川駅駐車場にて会員24名で救護活動を行った。残り約7キロということもありランナーはまだまだ元気な方や、筋肉の痙攣、靴擦れなどが見られた。今回の特徴は、冷たい風雨でのマラソンであったため、低体温症にて体温が上がらずリタイアを希望される方が多数出た。処置としては、疲労性筋筋膜症などに対するストレッチ、テーピングなどのケアを行い、約1,500人くらいの方に利用していただきたくさんの方々喜んでもらえて、柔道整復師をアピールできたのではないだろうか？



(広報員 福永郁雄)

腰痛について —（腰痛の予防法）—

埼玉県 大河原 晃

■腰痛の予防

腰痛を予防するためには、腰椎にかかる負担をできるだけ減らすことが大切です。体重の増加も腰に負担をかけ、急に体を捻る・重いものを持ち上げるといった、日常の些細な動作が腰痛の原因となります。慢性腰痛に悩む人は、体重を減らす・日常動作に気をつけるなど、日頃から腰痛を防ぐ工夫を心掛けましょう。腰の筋力を鍛え、腰痛を減らすという意味でも、腰痛体操は効果的です。

■腰痛を防ぐ日常生活のポイント

- 同一姿勢や中腰姿勢を避け、立位での作業は、片足を15～20cmの台に乗せて行います
- 重いものを持ち上げるときは、背筋を伸ばし、膝や股関節をよく曲げ、臀部（お尻）を落としてから持ち上げます。手足を伸ばし、腰だけ曲げるのはよくありません



- 高い所にある物を取るときは、踏み台などを使い、急に背筋を伸ばすことは禁物です
- 寝具は柔らかい物より硬めの物を使いましょう。
- 寝るときは、横を向いて膝を少し曲げます（＝えび姿勢）

仰向けでは膝の下にクッションや、座布団などを入れ、股関節を曲げます。背中の曲が

った年配者の場合は、枕を背中に入れ頭を高くしましょう。

- ヒールは3 cm以下のものが好ましいです

■要注意の痛み

- 激しい痛み
- 増強する痛み
- 姿勢に関係なくいつも感じる痛み
→安静にしても痛みが変わらない
- 発熱を伴う痛み
- 動作・咳・くしゃみで悪化する痛み
- 上肢または下肢の痛みを伴う痛み
- 神経麻痺を伴う痛み
→知覚障害・筋力低下・排尿障害
- その他
→間欠性跛行を伴う痛み

■腰痛を起こしやすいタイプ

腰痛を起こしやすい人は、姿勢の異常や体幹・下肢の筋力バランスの不良が多く見られます。具体的には、

- 腰椎の前彎（腰のそり）が強くなっている
- 腹筋の力が低下している
- 背筋や下肢の筋肉の柔軟性が低下している
- 腰・背中の筋力が低下し猫背気味になる

腹筋が弱くなり、腰を伸ばす（反らす）筋肉が収縮すると、背筋・腸腰筋・大腿四頭筋・膝屈筋が緊張します。そうすると腰椎の前彎（そり）が強くなり、腰痛を起こしやすい状態になります。逆に、農家の婦人に多くみられるのが、腰が曲がった状態です。腰を伸ばす筋力のほうが弱くなり、腰が曲がり腰痛を生じます。また、腹筋と共に、背筋の力も低下していることが多く、腰椎を支える力が全体的に低下していきます。

■腰痛体操の目的

腰筋と腹筋を強化することはもちろん、股関節の屈曲筋と伸展筋を強くし、その柔軟性を高めることは、腰椎の前彎カーブを正しく保つ上で非常に重要となります。

■腰のための運動・ストレッチ

無理をしないことが大前提です。急性期で炎症を起こしていたり、激痛があったり、動なくても痛みが増悪する場合には、運動よりも安静が第一です。また、短期間で無理な運動をしても効果が望めないばかりか、症状が悪化しかねません。急性期の痛みが治まってから、様子を見て行い、次の3点を注意して行いましょう。

- ・痛みを我慢しない
- ・お風呂などで温まる
- ・深呼吸をしながらリラックスを心掛ける

● 腸腰筋のストレッチ



● 腎部・腰部のストレッチ



● ハムストリング(ももの裏)のストレッチ



● 骨盤前傾の改善



● 股関節のストレッチ



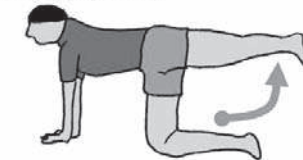
● ふともも・腸腰筋の運動



● 背筋・腎筋の運動



● ハムストリング・腎筋の運動



● 腹筋の運動



● 腰から背中へのストレッチ



文中イラスト出典：大修館書店発行
ストレッチ体操より

「腰痛シリーズ」を5回に分け連載してきましたが、今回で終了とさせていただきます。

『柔道整復外傷学ハンドブック総論』 『柔道整復外傷学上肢の骨折・脱臼』 『柔道整復外傷学下肢の骨折・脱臼』三部作

学術部担当理事 高崎 光雄

各養成校の学生は無論のこと、臨床実地現場で患者対応に追われる柔道整復師にとって、骨折や脱臼そして軟部組織損傷など、外傷の弛まぬ学習は必須のことである。来院する大外傷が減少した今日であっても、決して見逃してはいけない小外傷、小損傷は全身各所に存在し、あやふやな知識や半端な診立てで一気に医療過誤に陥ってしまう。経験則で慣例的に施術を行っている柔道整復師は、特にそんな多くの「落とし穴」に陥りやすく、またその危険さえ気付かないことがある。国民医療にとって今や必須の柔道整復業務が、さらに発展し国民の期待を担っていくためにも、自主的かつ積極的な生涯学習の必要性は日々高まっている。

また近年、一層盛んになっている「医接連携」で、整形外科や他科の医師などと頻繁に交流する機会の増えた柔道整復業務にとって、共通認識、共通言語で患者にとって最善のチーム医療を展開することが急務となっている。そんな中、多忙を極める開業柔道整復師は、スポット的に勉強会や学会で学習することはあっても、今更ながら「外傷学」の基本的事項から最新医療までを系統的に学習することは困難である。万巻の医学書を読み漁った諸兄であっても、臨床現場ですぐに知識を再確認することは至難の業であり、ましてや座右にあって辞書代わりに検索できる実用書はあまり無い。

今回、ご紹介する「医道の日本社」刊の「柔道整復外傷学総論」「柔道整復外傷学上肢の骨折・脱臼」「柔道整復外傷学下肢の骨折・

脱臼」三部作は、京都府立医大の平澤泰介名誉教授ら3名が監修しただけでなく、現在、教育現場で教鞭をとり外傷の臨床と研究に従事している気鋭の柔道整復師などが、総力を挙げて書き綴った「バイブル」的書籍となっている。巻頭の臨床外見写真から想像するまでもなく、多くの図表と写真を駆使してとても分かりやすい内容となっている。従前の治療法から多くの最先端の整形外科外傷学まで網羅されているので、多くの医学書を購入し検索する必要もなく、ほぼ一冊で診断のポイントから後療法に至るまで、一貫した治療を瞬時に理解できる良書である。医学書にしては価格も安価で購入しやすく、装丁も明るく綺麗である。ぜひ、柔道整復師の座右の書として診察机の上に置き、日常診療に役立てていただければ、先生方への信頼が増すばかりでなく、悩める患者様にとっても有難く感謝されること必定と思われる。ぜひお勧めしたい。



総 論：2,400＋税
監 修：平澤泰介 北條達也
上 肢：2,800＋税
監 修：平澤泰介 北條達也 橋本俊彦
下 肢：2,600＋税
監 修：平澤泰介 北條達也 橋本俊彦
発行所：株式会社医道の日本社

私の夢

治せる柔道整復師を目指して



大阪府柔道整復師会専門学院3年 山本浩司

私は学生時代に陸上競技をしていたのですが、怪我をして鍼灸接骨院にお世話になり、施術をしてもらいました。そして以前から興味があった鍼灸の専門学校に入り資格を取りました。その後、柔道整復師にも興味を持ち、スキルアップのためにも柔道整復師を目指すことにしました。

外傷である、骨折、脱臼、捻挫、打撲、挫傷の施術もしたくて、基礎からきつちりと、またじっくりと学ぶために4年制の専門学校を選びました。

4年制は3年制の学校とは違い3年制ではできない授業、たとえば医療倫理や統計学、臨床実習などの授業を受けることができます。それにより、現在のさまざまな医療について知れることや、学会などでの発表に役立つ知識を身に付けることができます。

現在、3年生になりましたが、1年生の

ときに基礎科目の解剖学、生理学などの授業をもう一度受けることになりました。二度目であっても自分が理解できていないことが多く、とても勉強になったと同時に、自分の知識のなさを痛感しました。

朝、晩と鍼灸師として臨床の現場で働きながら、柔道整復師の学校に通っています。臨床の現場に出ていると、人の体はわからないことばかりです。人の体を治せる臨床家になるにはどうすればいいかと悩みました。悩んで考えた結果、やはり勉強をして、少しでも知識を増やすことしか思いつきませんでした。

柔道整復師は単に物を「見る」のではなく人の体を「診る」仕事です。

「診る」という漢字は医療の現場でしか使わない漢字です。これから自分たちが患者さんを診ていくことは、それほど重大なことをしています。少し勉強をしたからとい

って、すぐに人の体を治せるわけではないと思います。

勉強とは毎日コツコツして、疑問に思ったことは自分で考えて答えを出していくものだと思います。学校の先生にも「授業で習ったことや自分で勉強したことで、間違っている所がないのか？それでいいのか？などを自分なりに問題提起して解決することが学問で、学び問うということである」とも教わりました。

しかし実技も必要だと思いましたが、基礎がわからないまま実技を勉強しても、それが施術に使えとは思いません。施術をするにあたって、患者さんにうまく説明できるとも思いません。

私はこれから先、国家試験に受かったからといってゴールではないですし、勉強を続けていくべきだと思っています。受かったようやくスタート地点に立てるわけです。

国家試験合格後の目標としては、接骨院あるいは病院などでさらに知識や技術を習得し、人として、また医療人としての人間性に磨きをかけ、いずれは開業し、地域に貢献したいと考えています。

現役で現場にいる限り、私は夢である『治せる柔道整復師』を志し、ずっと勉強をしていきたいと思っています。

緊急現場での連携を強化 日赤災害救護訓練

群馬県接骨師会 原沢研祐

平成24年10月28日(日)、前橋市の「田口消防学校」で「日赤群馬県支部災害救護訓練」が実施されました。この訓練は、去る4月28日、関越自動車道の藤岡JCT付近で、バスが壁面へ衝突する事故が発生し、死者7人・重軽傷者39人という大きな事態となりましたが、そのときのことを教訓として行われました。本会からは、牛込信喜隊長をはじめとする災害救護救援緊急出動隊8名が参加しました。

前橋赤十字病院副院長で高度救命救急センター長の中野実医師を中心として、各赤十字病院・県内各地域の消防・各部門の日本赤十字社ボランティアのメンバーが集合。総勢438人におよぶ大掛かりな訓練となりました。

訓練開始前に、中野医師がパワーポイントで訓練の目的や心構え、各部門の連携方法などを細かく説明。

いよいよ訓練開始です。大型バス2台が衝突して商業施設に突っ込み、一般車両も数台巻き込まれ、約100人の負傷者が出たとの想定。私たちはトリアージで黄色・グリーンと判断された負傷者への対応を任されました。次々と運び込まれてくる負傷者に対してしっかりと対応。あわただしい現場の中で効率よく施術を行うためには、お互いの連携をさらに深めていくことが大切だと感じました。

群馬県は、比較的自然災害が少ない地域であると考えられていますが、今回の訓練で想定した人的災害はいつ起きても不思議ではありません。本会としても、どのような災害にも出動できるよう、日頃から知識・情報を常に意識しながら、さまざまな訓練に参加していく必要があると考えます。



柔道（スポーツ）指導に於ける暴力について

大阪府 吉永豊貴

柔道（スポーツ）指導に於ける暴力が問題になっています。



新聞記事は、私が、柔道新聞の平成17年9月10・20日合併号に投稿した記事の写しです。その中で『スポーツ指導に於ける暴力』を痛烈に批判しています。その時点でも、オリンピック憲章は暴力を完全否定していますし、世間一般でも、スポーツ指導に於ける暴力は否定が常識になっていました（犬のしつけでも、暴力は否定されていました）。今回の件は「まだか？頭の中は、いったい、どうなっているのだろう」との思いです。そして、その指導者が評価されていた事は、もっと驚きです。大脳皮質で物事を考えられないのでしょうか？

現在でも身近な柔道教室で蹴りを入れる・平手・鞭打ちする、暴言を吐く等の指導者がいます。その中に柔道の有名校・大学の学費免除出身・指導者が多く含まれています。他スポーツも然りです。

多分、暴力を振るう指導者は、自分も、その環境で育って来て、そのことが「情熱があり、正義感に溢れていて、相手にも良く、正しい指

導だ」と信じて疑っていないのでしょう。柔道（スポーツ）エリートは、高校・大学と、それのみで来て、学問をしていない人も多くいるように見受けられます。そして強いので、チャホヤされて、その道では誰も逆らわず言い分が通り、つい「自分は偉いのだ」と錯覚する人もいるのではないかと思います。しかし、私・世間一般から見れば、人格を無視した暴力や罵倒、或いはセクハラをする指導者は、その競技がどんなに優れていても、大変醜く、つい顔を歪めて知能・人格を疑って、同じ柔道家・スポーツマンとして恥ずかしく思ってしまう。

暴力・罵倒・蹴り・鞭打ち・叩く等で柔道・スポーツが強くなるのであれば、私など今頃、オリンピックで金メダル10・20連覇位しています。そして、みんな、そうすれば良いのです。

人格を無視した暴力・暴言等は、選手の意識向上になるどころか逆に、意識消沈になってしまいます。そして、そんな指導者は軽蔑され、怨まれるのがオチです。今回の件が、それを如実に物語っています。

特に柔道は、他のスポーツとは違い、精神修業に重きを置く『精力善用・自他共栄の道』です。暴力や罵倒、パワハラ・セクハラでなく、理論や人格・柔道精神で指導をするべきだと思います。

全国の柔道指導の先生方、よく考えてみて下さい（柔道評論家）。

2005年(平成17年)9月10日・20日 合併号 柔 道 新 聞

読者の「夕華」

大阪 吉永豊貴

今年も野球、柔道等、スポーツ指導に於ける暴力事件がマスコミを賑わした。高校野球は、合宿中に教師が怒っている生徒に蹴りを入れて死亡させた。死因は脱水による心臓麻痺だったという。また先日は柔道の全日本コーチが、日本代表女子選手の頭を叩き小突きまわす姿が放映された。身近な場所の柔道でも、強くすることだけに力点を置いて暴力まがいのことをする指導者がいる。自ら「きょうつけい」の姿勢もとれず、礼儀作法の指導もできない、いずれもその道では有名校・大学出身者である▼肘が変形して炎症がある少年野球の子供が来院したことがある。「少し肘を休ませて治療するように」指示したが、指導者は「怠け

ているからケガをする。ケガは根性で治せ」と続投させた。体の出来上がってない子供に肘が変形するほど投げさせ、尚も無理強いすることは一種の暴力だろう。この指導者はプロ野球出身者だった▼マスコミに登場する評論家の中には、「スポーツではある程度の暴力は必要」と発言する人がいる。私見であるが、「暴力でスポーツが強くなる訳ではない」「ケガ・脱水症状は根性では治らない」「指導」と称して「暴力」を振るう姿は大変醜い。「競技は強いかもしれないが、人格は？」と思ってしまう▼どんなに競技が強くても暴力で百人に勝てない。強さだけを求めるスポーツは何の意味も持たない。暴力を振るう指導者は尊敬される訳がなく、恨まれ、人格を無視されるのがオチ。スポーツ指導において絶対に暴力を振るうべきではない。(57歳・整形外科経営)

各周年記念式典の開催日一覧

都道府県	式典名称	開催日・会場
公益社団法人 日本柔道整復師会	社団設立60周年記念式典	平成25年3月24日(日) 東京ドームホテル

平成25年度公益社団法人日本柔道整復師会主催学術大会一覧

	担当都道府県	学会名称	開催予定日
北信越	(社) 福井県柔道整復師会	公益社団法人日本柔道整復師会 第35回北信越学術大会 福井大会	6月15日(土) 6月16日(日)
北海道	(公社) 北海道柔道整復師会	公益社団法人日本柔道整復師会 第42回北海道学術大会 札幌大会	7月7日(日)
中国	(社) 島根県整骨師会	公益社団法人日本柔道整復師会 第38回中国学術大会 島根大会	7月14日(日) 7月15日(祝)
四国	(一社) 徳島県柔道整復師会	公益社団法人日本柔道整復師会 第48回四国学術大会 徳島大会	7月14日(日) 7月15日(祝)
東北	(社) 宮城県柔道整復師会	公益社団法人日本柔道整復師会 第34回東北学術大会 宮城大会	7月21日(日)
九州	(社) 福岡県柔道整復師会	公益社団法人日本柔道整復師会 第42回九州学術大会 福岡大会	7月27日(土) 7月28日(日)
東京	(公社) 東京都柔道接骨師会	公益社団法人日本柔道整復師会 第32回東京学術大会	9月8日(日)
近畿	(社) 兵庫県柔道整復師会	公益社団法人日本柔道整復師会 第38回近畿学術大会 兵庫大会	10月27日(日)
大阪	(公社) 大阪府柔道整復師会	公益社団法人日本柔道整復師会 第7回大阪学術大会	11月10日(日)
東海	(社) 三重県柔道整復師会	公益社団法人日本柔道整復師会 第48回東海学術大会 三重大会	11月17日(日)
関東	(公社) 山梨県整骨師会	公益社団法人日本柔道整復師会 第36回関東学術大会 山梨大会	平成26年 3月9日(日)

訂正とお詫び

前号日整はつらつ！Vol.9号28頁に誤りがございました。ここに訂正してお詫び申し上げます。

誤) HTLV1の感染原



正) HTLV1の感染源



骨継ぎの知恵袋 ～身近にある物を使った、応急処置～

学術部

アイディア募集

私たち柔道整復師は部分医療として骨折、脱臼、捻挫、打撲、挫傷、その他軟部組織を含む、骨・関節運動器系の急性・亜急性・反復性外傷に対する、保存的療法を業としております。その立場から、一般の方々に簡単な応急処置のアドバイスができないでしょうか？

日常生活やスポーツ現場においてはもちろんのこと、震災、交通事故、労働災害などで不慮の負傷に見舞われたとき、一般の方々が身近にある「物」を利用して施すことのできる、骨継ぎならではのアイディア溢れる、応急処置（固定）法を広く公募いたします。

特に、過去の震災やこの度の東日本大震災時に「医療救護ボランティア活動」において「これが役立った！」という「物」や一般の方に分かるその使い方などの情報をぜひ、ご教示いただきますようお願いいたします。

アイディアの提出は、下記の住所、FAX、または、E-mailにてお知らせください。

記

公益社団法人日本柔道整復師会 学術部
〒110-0007 東京都台東区上野公園16-9
FAX：03-3822-2475
E-mail:gakujutu@shadan-nissei.or.jp

◆原稿締切日は奇数月20日です◆

〈投稿される会員へお願い〉

最近、パソコンで作成された原稿が多くなっています。しかしながら、せっかく入力されたデータでも、印刷された用紙だけでは、もう一度入力しなければならないのが現状です。

ワードまたは一太郎などで作成された原稿の場合は、そのファイルをメールで添付送付されるか、または原稿にフロッピーやCDを添付してお送りください。

作業効率向上、さらには編集会議の経費削減にもつながりますので、ぜひご協力ください。なおフロッピーやCDは返却しませんのでご了承ください。

★編集会議の結果、投稿の内容により未掲載となる場合もありますのでご了承ください。また「投稿」の場合、必ず日整広報原稿と記入または入力してください。

★投稿文は各都道府県事務所を通して応募ください。

★原稿・投稿者名にはふりがなをお願いします。

宛先：“日整広報”<kouhou@shadan-nissei.or.jp>

日整はつらつ！発行日と原稿締切

※原稿の締切厳守をお願いします。（広報部）

号 数	11号	12号	13号	14号	15号	16号
原稿締切	3月20日	5月20日	7月20日	9月20日	11月20日	1月20日
発 行	5月20日	7月20日	9月20日	11月20日	平成26年 1月20日	3月20日

日 整 文 芸

(作品は1人3首〈句〉までといたします)

【短 歌】

山梨県 明風 散人

回想

山壁は高く激しく起伏して
愛染明王滝に打たるる

病めるもの来たれと慈悲の愛染明王

滝に打たれてお在す岩壁

洞窟の辺りに高き滝ありて

尊像二方飛沫に濡るる

奈良県 長谷川浩行

うれう

陽にまぶしゆう美たきは落水し

秋の季節にかさなるけしき

季節とは時を知らせし命をば

初冬の花かんめいあたう

溪谷に秋のひだまりさんぜんと

美しゆうつくる心になごむ

【俳 句】

群馬県 鈴木 乗風

牡蠣鍋

琴柱ぬき帯解き暮るる女正月

塗り剥げし椀は形見や根深汁

牡蠣鍋や余生に甘へ深酔す

東京都 伊藤 正信

寝正月叱る電話でありにけり

陣を組む鴨江戸川は国境

掛軸の達磨の眼姫始

石川県 川本 力雄

参道の坂動き出す大晦日

元旦の国旗にしるきたたみ皺

携帯の音がのまれる初詣

福井県 田上 滋良

冬の朝

白鳥の声ある方へ波返る

とぎれても会話の白く冬の朝

白鳥の首つつこんで泥化粧

【川 柳】

北海道 阿部 篤夫

知床や一ヶ月早く流水が

氷面下一度は見たいクリオネを

凍れるぞコマイ大漁風蓮湖

石川県 東 勝一

名護屋立つ戦国武士の雄叫びが

玄界の風に消えゆく触れ太鼓

荒れ山道孫の手を取り英彦山へ

「日整文芸欄では一般の方々からの投稿を募集しております」

広 報 部

日整文芸は、会員の方に加え、一般の方々からも「短歌」「俳句」「川柳」を募集します。一般の方の投稿は、日本柔道整復師会会員を通じて、都道府県名、紹介会員名および連絡先、作品提出者名を明記の上、ご応募してください。

日整文芸を通じて読者の皆様とよい交流の場となれと願っております。

作品は会員と同じく1人3首〈句〉までといたします。多くのご応募をお待ちしております。

宛 先 〒110-0007 東京都台東区上野公園16番9号
公益社団法人 日本柔道整復師会広報部
TEL : 03-3821-3511 FAX : 03-3822-2475
E-mail : kouhou@shadan-nissei.or.jp

編集後記

■各都道府県から防災訓練参加協力についてたくさん報告されています。素晴らしい報告ばかりです。最近では、近い将来発生が予想される「南海トラフ巨大地震」を想定して、被害予測に伴う具体策までも、訓練内容に盛り込まれているようです。

大きな災害に遭遇したとき、障がい者や高齢者など支援を必要とする要介護者たちは、なおさらのこと、心身に大きな影響及ぼすことでしょう。そこで、柔道整復師としては一般の防災訓練参加者より一步踏み込んで、障がい者らへの支援対応を防災訓練の中でアピールしたら如何なものか。 (多毛家)

■「輝ける未来への取り組み」“大阪マラソンランナーサポートに参加して”の中で、『術後アンケート』のアイディアに目が留まった。

ハガキを配布するアンケート方法は、帰宅してからの状態と翌日の体の状態について調査でき、大変有効だと思った。貴重な結果報告がホームページに掲載されるということで大いに参考にさせていただきたい。また、ゴール直後のアフターケアに留まらず帰宅後も継続してできる“ケア”の指導が評価されたところがあるが、日常の臨床に加えて、このような職種を活かした国民に喜ばれるボランティア活動がますます発展していくことに期待したい。 (家真舵)

■愛媛県健康公開セミナーの記事で、認知症研究でマスコミでも有名な、愛媛大学医学部附属病院抗加齢・予防医学センター長の伊賀瀬道也先生が「世界へ発信する認知症予防のための6つのヒント」というテーマで講演されている。

その中で今晚からでも実行できる「赤ワインで認知症予防ができる」とありますので、晩酌を欠かせない小生には、嬉しいデータですが飲みすぎには気をつけたいと思う。それと、「見た目年齢が高いと認知症になりやすい」とも出ていますので、お洒落をして若く見せるのも一つの方法だと思います。健康に気をつけて、足・腰を鍛えて、若さを保つように努力したいものである。 (魅家下)

■本号で紹介がありました、近年柔道整復師でありながら、努力し医学博士号を取得する快挙が、しばしば業界内で見受けられます。一方、いまだに何をやっているのか、疑問符の付く柔道整復師も多く存在します。

また、養成学校からも、毎年6,000人余りの卒業生が巣立っていきます。仲間が増えることは結構ですが、それに伴い質の低下が懸念されます。巷には、整体を取り入れて柔道整復業として平気で施術をしているところもあります。柔道整復師は医療人であるという誇りをもって業務に励んでいただきたい。医学博士号を取得した先生方に顔向けができませんから。(和座尾)

■3月2日から3日にかけて北海道を襲った暴風雪が、雪に慣れているはずの人々の命を奪った。一昨年は、想像を絶する数の生命が失われた東日本大震災が起こった。さらにその年から天変地異を予兆するような豪雨による甚大な被害が繰り返し発生している。

東日本大震災の報道で何度も使われた「想定外」。しかし、自然災害にはこの言葉は適さない。常に最悪の事態を予測し態勢を整えておかねばならない。ことわざに「天災は忘れた頃にやって来る」という物理学者で文学者の寺田寅彦氏の警句がある。これは、用心を怠らないこと、油断は禁物であるという戒めである。

大正12(1923)年に起きた関東大震災の発生を、その18年前に警告したことで知られる地震学者の今村明恒氏は、東日本大震災で壊滅的な被害を受けた三陸海岸へ何度も訪れた。そして住民に高所へ住居を移すよう説得したとのこと。今村氏の死後、半世紀以上たってあの大惨事が起きた。

さて、本誌19ページに社団法人熊本県柔道整復師会と県が防災協定を締結した記事が載っている。これは、同会の東日本大震災ボランティア、阿蘇豪雨災害ボランティア、九州北部豪雨による被災者の救護活動への参加実績などが高く評価された証である。

柔道整復師は、災害現場で運動器の怪我の程度を迅速に判断・処置できる専門職である。その技術を活かして防災訓練や救護活動へ参加することは、大変意義深いものがある。(多夢楽)

「日整はつらつ!」VOL. 10 MAR 2013

平成25年3月20日発行

公益社団法人 日本柔道整復師会

〒110-0007 東京都台東区上野公園16-9

電話 (03)3821-3511 (大代表)

発行人 萩原 正

編集者 永田 官久

制作・印刷所 東京リスマチック株式会社



柔道整復師倫理綱領

国民医療の一端として柔道整復術は、国民大衆に広く受け入れられ、民族医学として伝承してきたところであるが、限らない未来へ連綿として更に継承発展すべく、倫理綱領を定めるものとする。ここに柔道整復師は、その名譽を重んじ、倫理綱領の崇高な理念と、目的達成に全力を傾注することを誓つものである。

- 1、柔道整復師の職務に誇りと責任をもち、仁慈の心を以て人類への奉仕に生涯を貫く。
- 2、日本古来の柔道精神を涵養し、国民の規範となるべく人格の陶冶に努める。
- 3、相互に尊敬と協力を努め、分をわきまえ法を守り、業務を遂行する。
- 4、学問を尊重し技術の向上に努めると共に、患者に対して常に真摯な態度と誠意を以て接する。
- 5、業務上知りえた秘密を厳守すると共に、人種、信条、性別、社会的地位などにかかわらず患者の回復に全力を尽す。